

〈追悼文〉 中本正智先生のこと

竹中, 武

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言 / 琉球の方言

(巻 / Volume)

18-19

(開始ページ / Start Page)

30

(終了ページ / End Page)

31

(発行年 / Year)

1995-02-24

中本正智先生のこと

竹 中 武

私が初めて沖縄文化研究所の運営委員会に出席するため研究所に行った時、突然、“竹中さん、中本ですよしく”と声をかけられました。これが先生との最初の出会いでした。

学務部にいた関係で沢山の教員を知っておりましたが、このように気軽に声をかけられたのには驚きました。その後何回かご一緒に旅行する機会がありましたが、いつもニコニコして、わけへだてをしない本当に温厚な先生でした。90年2月18日の箱根寮の会合の帰りに、強羅駅まで歩いたお元気なお姿や、3月23日沖縄で調査の合間に船を出して釣りをし、取れた沢山の魚を料理していただいたことなど、思い出すとこれが最後の旅行となってしまう、自然に目頭があつくなりどうすることもできません。

1990年11月台湾で第3回中琉歴史関係国際学術会議が開催され、中本先生も報告されることになっており、御一緒できるのを楽しみにしておりましたが、出発の直前に入院され、今回の台湾行は中止せざるをえないという知らせがあり、驚きとともに一日も速い全快を祈ったしだいです。発病の原因は恐らく過労だったのでしょう。先生の言語調査は、自分で納得できるまで調査し決して手をぬかなかつたと聞きます。よく学生や同僚に調査をまかせ、その成果を自分の名前で発表するという学者がおられると聞きますが、まさに雲泥の差と思います。

丁度この頃、沖縄文化研究所では科学研究費（国際学術）の「中国福建省、琉球列島交渉史の研究」と浦添小湾字誌編集委員会の「失われた集落・小湾－聞き書きによる復元」という2つプロジェクトが発足しましたが、先生はこれらの言語班責任者として参加され、今考えると全快されていなかったのではなかったかとも思われますが、中国に2回調査に行かれました。また沖縄にも何回か行かれ、小湾方言辞典作成のために、小湾自治会館で聞き取りされている元気なお姿が目の前に浮かんできてどうしても帰らぬ人になってしまったとは思えません。

先生が小湾方言辞典作成にどのような思いがあったか、「琉球の方言」15号に記述があるので、それを再掲したいと思います。

失われた村落・小湾の言語調査

ことばと社会は一体である。ことばをうしなったとき、その社会は崩壊し、社会を失ったとき、ことばも消えうせる。小湾は沖縄戦の昭和20年まで、浦添にあった農業中心の村落で

あった。この沖縄戦で村落全体が破壊され、村落のあった地域は、戦後、飛行場として軍用地に接収され、完全にその姿をうしなった。

ふるさを想うということは、たとえあばらやであったとしても、生まれた家を想い、子供のとき遊んだ浜や野原、そして山河を想うことである。してみると、小湾で生まれた人びとにとって、ふるさを想う一片のかけらさえも持っていないということになる。

小湾の人びとは、ふるさを失うことになったが、団結力があり、幸いにして、ふるさから、そう遠くない小高い丘へまとまって移動することができた。ふるさとの場所は移ったが、村落社会を失うことがなかったのである。いうまでもなく、現在でも小湾として一社会の機能を維持している。

一社会の機能が保たれたとはいえ、そのことばも、次第に変化していくのが道理である。そして新しい土地で育った世代には、ふるさとの記憶はない。

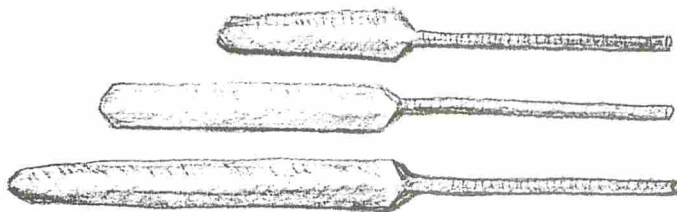
ふるさを知る人びとは、自分たちの世代で、ふるさとへの記憶を断絶させるのは惜しいと考えた。小湾という一社会を、言語ばかりでなく、文化一般からながめた全体像を記述して置く企画がたてられた。言語では「小湾方言辞典」の企画をたてている。

先生はこの企画半ばで、永久に帰らぬ人になってしまいました。残念のきわみです。

しかし先生ご安心ください、今「小湾方言辞典」は、野原三義先生・加加工真市先生・名嘉真三成先生・橋尾直和先生の手で完成に近づいております。第1号は先生のご霊前に捧げたいとおもいます。どうかお見守りください。ご冥福をお祈りいたします。

さようなら。さようなら。

(法政大学元学務部長)



ウェーク カット・中本正智